

『学会開催報告』

日本分子生物学会第11回春季シンポジウム・
金沢国際がん生物学シンポジウム

The 11th MBSJ (Molecular Biology Society of Japan) Spring Symposium
International Symposium on Tumor Biology in Kanazawa

金沢大学がん進展制御研究所遺伝子・染色体構築研究分野
平尾 敦

2011年5月25～26日、日本分子生物学会第11回春季シンポジウムおよび金沢国際がん生物学シンポジウムの合同シンポジウムを開催しました。日本分子生物学会は毎年12月に開催されますが、規模の拡大の一途をたどり、年会の開催が少数の大都市に限られるようになっております。こうした状況を補完し、地域の分子生物学研究の発展と理解の促進を目的に、2001年より地方都市での開催がスタートし、本年度は金沢で開催することになりました。一方、金沢国際がん生物学シンポジウムは、がん生物学の理解、海外の研究者との交流を目的に、毎年、金沢大学がん進展制御研究所が開催しております。今回は、日本分子生物学会と金沢大学がん進展制御研究所が共同で合同シンポジウムとして開催することになりました。本シンポジウムのねらいは、広く分子生物学・がん生物学に関わる研究者・学生が一同に会し、交流を深めることとし、そのため、ひとつの領域に偏ることなく、できるだけ広くテーマを設定いたしました。その目玉として、がん生物学の話題を提供するInternational sessionを設けるという形式をとりました。

特別講演として、京都大学大学院医学研究科長田重一教授、(財)先端医療振興財団先端医療センター鍋島陽一センター長にそれぞれアポトーシス、Klotho familyの生理機能に関する素晴らしいご講演をいただきました。International sessionでは、がん進展制御研究所向田直史所長による挨拶からスタートし、国立シンガポール大学伊藤嘉明教授やオーストラリア Monash Institute of Medical ResearchのBrendan Jenkins博士による胃がん発症メカニズムに関するご発表、韓国Sookmyung Women's UniversityのWoo-Young Kim博士による肺がん発症メカニズム、本学がん進展制御研究所の高橋智聡教授によるRas-Rb経路と発がん、フロンティアサイエンス機構のRichard Wong准教授によるNucleoporinと発がんに関するご発表があり、最新のがん生物学の進展に関して大いに盛り上がるセッションとなりました。

招待講演として、免疫・アレルギー・炎症の分子生物学(小安重夫 慶應義塾大学医学部教授、熊ノ郷淳 大阪大学大学院医学系研究科教授)、時間生物学(吉村崇 名古屋大学大学院生命農学研究科教授、平山順 東京医科歯科大学難治疾患研究所准教授)、メタボリック症候群の分子生物学(山内敏正 東京大学大学院医学系研究科准教授)、箕越靖彦 自然科学研究機構生理学研究所教授)、疼痛の分子機構(井上和秀 九州大学大学院薬学研究院教授、植田弘師 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授)、再生医学とエピジェネティクス(眞貝洋一 京都大学ウイルス研究所教授、古関明彦 理研免疫アレルギー科学総合研究センターグループディレクター)に関して、それぞれの研究領域の最先端のご発表があり、多くの聴衆を魅了するセッションとなりました。さらに、二日目の午後からのLeading Edgeセッションでは、先端領域におけるブレイクスルーを目指して顕著な研究活動を展開されている若手研究者(後藤由季子 東京大学分子細胞生物学研究所教授、高柳広 東京医科歯科大学大学院医歯学

総合研究科教授、瀧木理 東京大学大学院理学系研究科教授、中山敬一 九州大学生体防御医学研究所教授、原英二 公益財団法人がん研究会がん研究所部長、水島昇 東京医科歯科大学医歯学総合研究科教授)から、分子生物学の将来の方向性を示すような素晴らしいご発表が続きました。

ポスター発表では、海外からの演題も含め本学を中心に計96演題の発表があり、2日間で延べ743人(1日目:355人 2日目:388人)が参加し意見交換が行われました。ポスター会場においては、積極的に発表者に質問する光景が見られるなど、分子生物学・がん生物学に対して理解を深める絶好の機会となりました。またセッションの合間には、オーケストラアンサンブル金沢のメンバーによる弦楽四重奏が演奏され、リラックスした雰囲気の中でサイエンスを楽しむシンポジウムとなりました。

本シンポジウムに伴い、4月24日(日)、金沢21世紀美術館・シアター21において、市民公開講座「高校生のための分子生物学：金沢21世紀美術館でサイエンス！」を開催しました。会場が美術館ということから、「分子生物学とアート」というテーマで、お二人の講師の方にご講演を頂きました。科学ジャーナリスト・元NHK解説委員の小出五郎氏には、「名画にみるころとからだ」と題し、ダヴィンチやミケランジェロなどの芸術作品を用い、科学者及び芸術家双方からの視点を分かりやすくご講演頂きました。また、大阪大学大学院生命機能研究科・教授の近藤 滋氏には、「波が作る生物の模様と形」と題して、身近な魚や動物を用いたご自身のこれまでの研究から発見された生物と数学の不思議な関係をご講演頂きました。どちらの講演も参加した約140人の高校生の知的好奇心をかきたてる内容で、質問コーナーにおいては、積極的に質問する生徒が多数見られました。高校生にとって、身近なところから分子生物学の楽しさ、面白さを実感してもらい絶好の機会となりました。将来の分子生物学・がん生物学を担う若者の育成・啓蒙活動として非常に有意義な講座となりました。

本学シンポジウムにご協力いただきました多くの先生方、また当日ご来場いただいた方々に心よりお礼を申し上げます。最後に、本学術集会をご支援いただきました金沢大学十全医学会に深く感謝いたします。



がん進展制御研究所 向田直史所長挨拶



国立シンガポール大学 伊藤嘉明教授による講演